

JRS

第74回  
日本医学放射線学会総会

JSRT

第71回  
日本放射線技術学会総会学術大会

JSMP

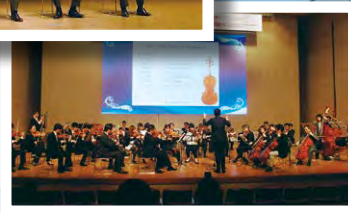
第109回  
日本医学物理学会学術大会

ITEM

2015  
国際医用画像総合展

特集2

# JRC Be Cool and Practical 2015



放射線医学分野の学術集会として国内最大の規模を誇るJRC2015が、4月16日(木)～19日(日)の4日間の日程で開催された。今回のメインテーマは「Be Cool and Practical」。天候にも恵まれたこともあり、会場となったパシフィコ横浜には、多くの参加者が訪れた。4日間の参加者数は、第74回日本医学放射線学会(以下、JRS)総会が5301人、第71回日本放射線技術学会(以下、JSRT)総会学術大会が4959人、第109回日本医学物理学会(以下、JSMP)学術大会が953人、非会員が1268人で、合計1万2481人。各学会ともに前年の参加者数を上回った。また、2015国際医用画像総合展(ITEM in JRC 2015)には157社が出展。入場者数は2万2457人を数えた。





杉村和朗・JRC代表理事



大友 邦・JRS会長



平野浩志・JSRT大会長



和田真一・JSMP大会長



小松研一・JIRA会長

### 放射線医学の現状と近未来を冷静に見据え、 実際に対処する

第74回JRS総会の会長は大友 邦氏（東京大学大学院）、第71回JSRT総会学術大会の大会長は平野浩志氏（信州大学医学部附属病院）、第109回JSMP学術大会大会長は和田真一氏（新潟大学大学院）が務めた。

今回のメインテーマ「Be Cool and Practical」について、大友JRS会長は大会の公式ホームページの中で、「放射線医学は医学の進歩と医療機器・技術の進化の双方から大きな影響を受けるのが特徴であり、時代と状況に応じた立ち位置が求められる。このような背景を持つ中で、放射線医学が日常臨床の要望に応えつつ進化していくためには、冷静に現状と近未来を見据え、実際に対処することが肝要である」と説明している。

### さらなる国際化が進む JRC

2日目の17日午後にはメインホールにて合同開会式が行われ、日本ラジオロジー協会（以下、JRC）代表理事の杉村和朗氏（神戸大学大学院）や3学会の会長と大会長、ITEMを運営する日本画像医療システム工業会（以下、JIRA）の小松研一会長が出席した。アンサンブルデュナミスの弦楽演奏で幕を開けた合同開会式において、杉村JRC代表理事は、JRCが年々ブラッシュアップしつつ発展を続けてきたと述べた。その取り組みの一つとして国際化を挙げ、英語での発表が増加し、海外からの参加者数も伸びていると説明。さらに、ITEMも海外企業の出展が増えているなど、確実に国際化の道を歩んでいることを強調した。杉村JRC代表理事は、こうした状況を踏まえて、「ぜひ来年も参加したいと思えるような学術集会にしよう」と会場の参加者に呼びかけた。



合同開会式でのアンサンブルデュナミスの演奏

合同開会式では、大友JRS会長、平野JSRT大会長、和田JSMP大会長、小松JIRA会長の基調講演が行われた。

大友JRS会長は基調講演において、自身が教授を務める東京大学大学院医学系研究科放射線医学講座を紹介した。同大学の放射線部門は1927年に始まり、34年には中泉正徳氏が初代教授に就任した。大友JRS会長は6代目の教授である。大友JRS会長はこれらの歴史を説明した上で、現在の医局員数や関連医療機関の概況を取り上げ、多くの優秀な人材が日常診療、研究に取り組んでいると述べた。

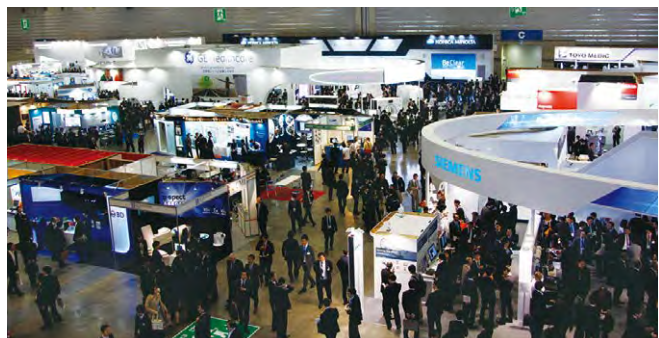
次いで登壇した平野JSRT大会長は、長年の研究テーマであるトモシンセシスをテーマに講演した。トモシンセシスは、1986年に第1号機が国内で開発され、以後着実に進歩を続け、FPDの登場により、一般撮影、透視、乳房など、多くの臨床現場で利用される技術となった。平野JSRT大会長はその技術の歩みを紹介した。

また、和田JSMP大会長は、医学物理学における、国際学会の設立とその活動を解説したほか、JSMPの歴史を説明した。1953年に日本医学放射線学会の物理委員会の創設に始まるJSMPは、その後、2000年に2つの学会が統合して、現在に至っている。2015年2月の時点で、会員数は2229人までに増えた。

最後に登壇した小松JIRA会長は、JIRAの活動内容を紹



17日午前に行われた2015国際医用画像総合展の開会式



にぎわいを見せる2015国際医用画像総合展会場





合同特別講演では平田氏に感謝状を授与



合同シンポジウム1の総合討論

介した。現在、わが国では、健康・医療を成長分野として、経済成長戦略における重要な産業と位置づけている。小松JIRA会長は、こうした状況を踏まえて、政府が進める医療のイノベーションにJIRAも貢献していくと述べた。さらに、JIRAが画像診断機器産業における国際活動の中心的なメンバーとしてかかわっていることを説明し、出席者に理解と協力を求めた。

### 地震のイメージングをテーマにした合同特別講演のほか3テーマの合同シンポジウムを用意

4日間の期間中は、「Be Cool and Practical」というメインテーマに基づき、合同特別講演が1題、合同シンポジウムが3セッション用意されたほか、各学会のプログラムが構成された。なお、一般演題の採択数は、JRS総会が口述339題、展示282題、JSRT総会学術大会が口述470題、展示130題、JSPM学術大会が口述185題、展示1題となっている。

合同開会式の後は、東京大学地震研究所の平田直氏を迎え、「予想される首都圏の震災と地震波トモグラフィで探る巨大地震の姿」をテーマに、合同特別講演が行われた。

司会は、栗林幸夫氏（山中湖クリニック/慶應義塾大学名誉教授）。この講演において、平田氏は、東日本大震災の仕組みについてGPSデータなどを基に解説したほか、想定される首都圏の地震の被害予想と、地震波による地中イメージング技術である seismic tomography を紹介した。

合同特別講演に続き行われた合同シンポジウム1では、石口恒男氏（愛知医科大学）と赤羽恵一氏（放射線医学総合研究所）が司会を務めた。「被ばく管理：医療被ばくの見える化」をテーマに、Paul H. Ellenbogen氏（米国放射線学会）、John Damilakis氏（University of Crete）、五十嵐隆元氏（総合病院国保旭中央病院）、Mohan Doss氏（Fox Chase Cancer Center）が発表した。

また、18日の合同シンポジウム2は、茂松直之氏（慶應義塾大学）と奥村雅彦氏（近畿大学医学部附属病院）を司会に、「放射線治療におけるチームワークの重要性」をテーマに行われた。このシンポジウムでは、5人の発表者が登壇。放射線腫瘍医の立場から、中野隆史氏（群馬大学）が発表した後、医学物理士の鈴木隆介氏（北海道大学病院）が自院における役割を紹介した。また、辰巳大作氏（都島放射線科クリニック）は、クリニックにおけるチームワークについて発表。4人目の森慎一郎氏（放射線医学総合研究所）は、「研究を臨床へつなげるチームワーク」をテーマに、最後に登壇した下谷久美氏（国立がん研究センター中央病院）は、看護師の役割について、それぞれ説明した。

最終日19日には、合同シンポジウム3が行われた。テーマは、「放射線医療における自動化（オートメーション）技術にどう向き合うか?」。平岡真寛氏（京都大学）と西尾禎治氏（国立がん研究センター東病院）が司会を務め、まず、増谷佳孝



国立大ホールのマリンロビーにあるCyPos閲覧エリア



電子ポスタープレゼンテーションブース



マリンロビーの実機展示コーナー



メインホール前のイメージ・インタープリテーションコーナー



最終日の合同表彰式



合同閉会式には JRC2016 の会長・大会長も出席

氏（広島市立大学）が、「計算機による医用画像理解を目的とした解剖学的構造物のモデリング」と題して発表した。次いで登壇した木戸尚治氏（山口大学）は、CADの臨床展開について解説。3人目の有村孝孝氏（九州大学）は、コンピュータ支援放射線治療法の開発と臨床応用を報告した。最後に、角谷倫之氏（東北大学）が、放射線治療における画像レジストレーション技術をテーマに発表した。

### JRC 2016 のメインテーマは 「まなび、のぼし、つなげる放射線医学」

JRC 2015 は学会、ITEM とも参加者数、入場者数が増加し、活気に満ちた4日間だった。次回もさらなる国際化が進み、

海外からの参加も増えることが期待される。その JRC 2016 は、「まなび、のぼし、つなげる放射線医学 (Instructive, Innovative, and Integrative Radiology)」をメインテーマとして、2016年4月14日(木)～17日(日)のスケジュールで、パシフィコ横浜を会場に開催される。第75回 JRS 総会会長を玉木長良氏（北海道大学大学院）、第72回 JSRT 総会学術大会会長を小倉明夫氏（群馬県立県民健康科学大学）、第111回 JSMP 学術大会会長を荒木不次男氏（熊本大学大学院）が務める。

インナビネットの「スペシャルレポート」公開中！  
<http://www.innervision.co.jp/report/item/2015>

## CT コロノグラフィトレーニングコース — 画像ワークステーションを用いたハンズオンによる診断法の実践 —

今年で8回目となる「CTコロノグラフィトレーニングコース—画像ワークステーションを用いたハンズオンによる診断法の実践—」（主催：JRS CTC トレーニングコース実施委員会）が、JRC 初日となる16日（木）の10時から18時まで、パシフィコ横浜アネックスホールのF203 + F204 + F205 + F206 を会場に開催された。

司会・進行は、飯沼 元氏（国立がん研究センター中央病院）、満崎克彦氏（済生会熊本病院予防医療センター）、三宅基隆氏（国立がん研究センター中央病院）の3名が務めた。企画は医師と診療放射線技師を対象にしており、参加は事前登録制で募集人数は150名。ハンズオントレーニングはワークステーション台数に限りがあるため、先着順となった。なお、ハンズオントレーニングで使用されるワークステーションは、ザイオソフト社の「Ziostation2」、AZE社の「AZE VirtualPlace」、東芝社の「Colon Viewing」、富士フイルム社の「SYNAPSE VINCENT」である。

開会挨拶に立った飯沼氏は、「CTコロノグラフィトレーニングコースは2007年に始まったが、回を重ねるごとに参加者も増え、嬉しく感じる。今回は症例を一新したので、すでにCTCを始めている方にも、これから始められる方にも、実機を用いたハンズオンで有益な情報を感じてもらい、CTCの普及につなげてほしい」と述べた。

メーカー各社のCTC用ワークステーション最新情報の発表に続き、2題のミニレクチャーが行われた。1題目は、北川まゆみ氏（国立がん研究センター中央病院放射線診断科）による「当センターのスクリーニングCTCにおける放射線技師の役割」。北川氏は、CTCの前処置、撮影、レポートワークフローやコツを説明し、有効な検査とするための診療放射線技師の役割について述べた。

2題目は、平野雄士氏（小樽掖済会病院放射線科）による「スクリーニングCTCにおける検査被曝の低減化」。平野氏は、CTの被ばく低減の考え方や実効線量換算について解説するとともに、超低

線量撮影や逐次近似応用再構成法を適用した撮影について、ファントムによる検討を紹介した。

ランチオンセミナー（エーザイ/エーディア共催）では、飯沼氏が座長を務め、2つの演題が用意された。最初に、松岡

正樹氏（まつおかクリニック）が「実地臨床におけるCTCの使い方!？」を講演した。松岡氏は、自院にてCTCを始めた経緯を紹介した上で、実際の検査における問題点と対策について説明した。

次に、松本啓志氏（川崎医科大学消化管内科）が「大腸CT検査（CTC）で診る大腸疾患」を講演。松本氏は消化管内科医としての立場から、同院における大腸がん検診の取り組みや、全大腸内視鏡困難例への対応、慢性炎症性腸疾患診療について症例を示しながら解説し、CTCの有用性を説明した。

午後の実機を用いたハンズオントレーニングは、三宅氏が司会・進行を担当し、「CTC診断の基礎（早期病変の捉え方）」「スクリーニングCTC診断の実践」の3段階のプログラムが組まれた。レクチャーを挟みながら、参加者は実際にワークステーションを操作して、操作方法や読影方法を体験した。

● 共催：日本メドラッド、エーザイ/エーディア、伏見製薬、東芝メディカルシステムズ、ザイオソフト/アミン、AZE、富士フイルムメディカル



ハンズオントレーニングの様子